



Title	<書評>Manual of Brazilian Portuguese Linguistics, edited by Johannes Kabatek and Albert Wall, 2022, Berlin : De Gruyter.
Author(s)	黒澤, 直俊
Citation	Anais : Colóquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2024, 50, p. 45-49
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/98442">https://hdl.handle.net/11094/98442</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

*Manual of Brazilian Portuguese Linguistics*,  
edited by Johannes Kabatek and Albert Wall,  
2022, Berlin: De Gruyter.

黒澤 直俊

このシリーズはロマンス語関係のマニュアルを出版していて、ポルトガル語にはすでに *Manual de linguística portuguesa* が、Ana Maria Martins と Ernestilha Carrilho の編集で 2016 年に出版されている。アフリカやアジアでのポルトガル語の言語接触や社会言語学など一定の広がりは認められるが、主な対象はポルトガルのポルトガル語であった。もちろん、企画段階ですでにブラジルポルトガル語版が予定されていたわけだから当然の方向性である。この 2022 年のマニュアルは英語で書かれ、読者層を広く設定している。教室での経験からわかるようにポルトガルとブラジルで言葉は大きく異なる。発音から目的語代名詞の位置、単語の用法上の違いは文法書でも言及されている。ポルトガルのテレビを見ているとブラジルから訪問している芸能人のインタビューが放映されることがあり、質問の意味が理解されていないのが明らかな場面もある。コミュニケーションギャップの一種だが、あるブラジルの歴史言語学者は語用論やコミュニケーションストラテジーが違うと示唆していた。

ブラジルポルトガル語に関する文法研究は近年かなり精密化していて、目的語代名詞についても、母語話者の一部には社会方言の違いで代名詞が一部欠落していることや、方言では話し言葉から接続法が消えているものがあること、さらに多くの話し手にとって接続法は第二言語習得の問題として扱われるべきと主張しているブラジルの生成文法研究者すら存在する。教科書の例文や教室での授業との関係で例を挙げれば、ポルトガルのポルトガル語は言語学でいう典型的な pro-drop 言語で、これは pro = pronomē、つまり主語の代名詞を省略するのが普通という意味である。ロマンス語にはフランス語のように主語が接語化して省略できない言語もある。pro-drop 言語の授業の一番最初の説明は「動詞の語尾で主語は示されるので、主語代名詞は強調や対比などを除き省略される」であるが、これは実はブラジルのポルトガル語には当てはまらない。ブラジルポルトガル語では「主語代名詞は省略出来るが、省略しないことが多い」

と教えなければならない。もちろん、話し言葉や書き言葉、文体、スタイルなどで異なる。一人称単数では動詞の語尾は一義的だから主語はわかるはずだが、ブラジルポルトガル語の話し言葉で *eu* は省略しないのが普通である。この問題を最初に扱った研究はおそらく 1993 年に出版された Ian Roberts と Mary A. Kato 編の *Português brasileiro, uma viagem diacrônica* の中の Maria Eugênia Lamoglia Duarte による *Do pronome nulo ao pronome pleno: a trajetória do sujeito no português do Brasil* ではないかと思う。論文は 1845 年から 1992 年までリオ・デ・ジャネイロで上演された芝居の台本をピックアップして調査し、主語を省略しなくなる傾向を示したものだが、興味深いことに 1 人称ではこの傾向は明らかなのに、3 人称では *pro-drop* 的傾向が依然として強く、矛盾する様相を呈している。この書には続編があり、2019 年に *Português brasileiro, uma segunda viagem diacrônica* として最初の 2 人の編者に Charlotte Galves を加えた 3 人で刊行されている。同じ著者による *O sujeito nulo referencial no português brasileiro e no português europeu* のタイトルで 93 年の論文が検証され、ポルトガルのポルトガル語との比較などが行われている。

さて、書評の直接の対象ではないものについて長々と述べてきたのは、この二つの *viagem diacrônica* は、ブラジルのポルトガル語がポルトガルのポルトガル語とは異なった方向へ変化していると明示的に主張した記念碑的著作であったからである。しかし、これらの二書は最先端の理論言語学に基づいて記述されているので難解であるという欠点がある。生成言語学の理論に通じていないと理解はほとんど不可能に近い。その意味で、特定の理論を前提としない解説的なマニュアルの出版は長く待たれていた。

本書は、18 頁ほどの導入の章に加え、全体が 20 章で構成され、600 頁強のつくりである。0 章はブラジルポルトガル語研究の現状というタイトルで近年のコーパス構築の状況や中心的な研究テーマなどが紹介されている。コーパスに関する情報がまとめて提示されているのは貴重である。続く 20 の章の基本的構成は、歴史的経緯に基づいた言語史の概要や社会の歴史、そして背景としてブラジルでの言語接触の歴史が説明され、さらに音声、形態、統語、語彙という言語構造の核心について 16 世紀以降の変化が解説されている。これらについては別途、共時的な観点からの章が立てられ十分な説明がある。これらを通じてポルトガル語の教師が教室で感じたり、

ブラジルとポルトガルの言葉の違いに起因する問題のほとんどが説明されていると言える。章立ては以下である。

0. Introduction: the state of the art in Brazilian Portuguese linguistics
1. Brazilian Portuguese linguistics: an overview
2. The social history of Brazilian Portuguese
3. The history of linguistic contact underlying Brazilian Portuguese
4. Historical phonetics and phonology
5. Historical morphology
6. Historical syntax
7. The history of the lexicon
8. The debate on Brazilian and European Portuguese
9. Dialectology and linguistic geography
10. Sociolinguistics
11. Brazilian Portuguese: contemporary language contacts
12. Sound-related aspects of Brazilian Portuguese
13. Morphology
14. Syntax
15. Lexicon
16. On the history of semantic studies in Brazil
17. Spoken *vs.* written language
18. Onomastics and toponomastics
19. Linguistic policy and the orthographic agreement
20. Psycholinguistic studies: language acquisition and processing

ブラジルのポルトガル語では従来から社会階層による違いが大きいことが指摘されてきた。社会言語学の章があるのはその意味で当然としても、地理的な言語研究は遅れていた。9章はこの問題を扱っているが、2014年にブラジル言語地図が刊行されたことを受け、北東部、南東部、南部の各地域に関連して刊行された言語地図の概況が与えられている。地図には社会的言語差を組み込んで地図化したのもあり興味深い。地理的な言語差を地図上に投影する分野は従来は言語地理学 *linguistic geography* と呼ばれていたが、最近では *geolinguistics* と呼ぶ。地理言語学または空間言語学とでも訳すべきだろう。ブラジルの地域的言語差としては 1950 年代に *Antenor Nascentes* によって報告された、強勢前無強勢中高母音 *e, o* の発音が北部では広く[ɛ, ɔ]、南部では狭く[e, o]となることが知られていたが、考えてみ

るとあまりにも漠然としている。この章でバイアあたりでは標準的な *lua* に加えて *luma*, *lūma*, *lūa* も併存しているという記述があり、かなり衝撃的である。一般的には、母音間の *n* が先行母音を鼻音化し脱落するのは 11、12 世紀あたりとされ、16 世紀のテキストでも不定冠詞の女性形は *ūa* と表記されることが多く、*ūa* > *uma* の変化は、母音間の *n* の脱落からはかなり後である。ブラジルの植民開始は 1532 年であるが、古い言語状態が地理的に残ることは普通にあることで、ポルトガルでも 16 世紀前半の言語状態は北東部の山岳地帯に残っているし、その前の状態がスペイン側のポルトガル語の飛び地に 1950 年代まで残っていたことが記録されている。言語変化の要因として言語接触が重要な役割を果たすことは、最近よく指摘されるが、本書では 3 章が歴史的な言語接触を、11 章で現代の言語接触が扱われている。ここで言う言語接触とは基本的には移民によってもたらされた言語で、植民地時代には原住民であるインディオの諸言語の影響があったとしても、アフリカから奴隸として連れてこられた人々の言語や、独立後は欧州やアジアからの移民が継承語として維持する言語が主たる対象である。ブラジル南部のドイツ系の移民や、中南部でのイタリア系の移民の存在は知られているが、11 章はかなり踏み込んだ説明を与えている。話し手の数でポルトガル語に次いで多いのは、ドイツ語の方言の話し手で、南部の自治体には公用語に認めているものもあるという。ドイツ語で *Hunsrückisch* と *Pomersch* と呼ばれるものがそれで、前者はパラティネート地方とかプファルツと呼ばれるドイツ南西部の方言で、現在では衰退しているとされ、後者は今のポーランドの一部にかつて存在したドイツ語の方言で、欧州ではもう存在しないという。また、イタリア系の移民が集中するのはサンパウロ州で、隣接するパラナ州や南部の州がそれに続くが、ヴェネトの出身者が多く、ヴェネト方言などのイタリア語の方言は南部では *Talian* として公用語とする自治体もある。スラヴ系では 19 世紀末からウクライナやポーランドからの移民が多いが継承語として維持されているのはウクライナ語である。さらに、日系移民や中国、韓国などからの移民にも言及されているし、南北戦争後に合衆国の南部から移民があったことも言及されている。しかし、なかでも興味深いのは *Portuñol* と

通称される、ウルグアイやアルゼンチンとの国境地帯で観察されるポルトガル語とスペイン語の混合言語的使用である。10 頁近くがあてられているが、ウルグアイとアルゼンチンでは *Portuñol* の受け入れが異なることや、典型的な特徴などが説明され、さらに言語使用の実態が流動的であるとの指摘がある。アルゼンチンのミシオネス州の *Chuy* / (ブラジル側で) *Chui* やウルグアイの *Rivera* という都市は街自体が国境線の上に存在するという点で特異である。

また、マニュアルに人名学と地名学の章が立てられている。ロマンス語圏の地名研究は伝統的で地名によって過去の言語の痕跡を突き止めることが出来るからであるが、反面、民間語源のこじつけも多く注意を要する分野である。ここでは、植民地時代と独立後に分けて地名の構成要素についてかなり踏み込んだ説明が行われている。人名についてはより簡潔である。言語政策に関する 19 章は、内容的にはブラジルの言語政策史と呼べるような内容で、独立後の言語意識に関する議論が詳しい。最後の章は心理言語学と題され、母語習得の問題にあてられている。章が前後するが、話し言葉と書き言葉と題された 17 章は内容的には文を超えた談話のレベルでの分析を扱ったもので、やや理論的かもしれない。ただし、理論を背景に問題を展開するときは、一定の説明が与えられているので、理解しやすいと思う。本書はまちがいなくポルトガル語研究に関わる者にとって必読の書と言える。